

イエイツの詩の始まり

——“The Song of the Shepherd”と“The Sad Shepherd”——

岡 田 仁

I

イエイツ (William Butler Yeats, 1865-1939) は、最後の作品を完成した死の一週間前まで、その創作力が衰えることはなかった。イエイツが初めて自分の作品を発表したのが1885年だったから、詩作活動は半世紀を越えることになる。時間と空間の彼方を求めながらも、同時に、自分の置かれた時代と国家にこだわり続けた一人の優れた詩人の作品群を考えると、この50年という期間が持つ意味は大きく、また、複雑である。

この間に、芸術と魔術によって、おぼろげな美を薄明の中に呼び起こそうとした世紀末詩人は、「笑顔を振りまく60歳の」¹⁾ 上院議員を演じるようにもなるし、ノーベル文学賞も受賞する (1923年)。もちろん、公職や社会的榮譽それ自体に特別な意味があるというわけではない。重要なのは、イエイツの詩がこの半世紀の間に、時代とともに、卑近、卑俗な世界へと下降しながら、しかも、その輝きがますます深みを増していったことである。その輝きの秘密は、恐らく、上院の貨幣発行委員長を勤めたこの詩人の正体が、錬金術師でもあったということかもしれない。

得られぬものを求めてしまう人間の宿命の不条理に戦いを挑んだ「心満たされぬ」若い詩人²⁾ と、生を謳歌するものたちを横目に、ぼろぼろの肉体を引きずりながら、魂を金細工の鳥に変容させようと願う老詩人³⁾ との間にあるのは、「術」の向上であり、「材質」の卑しさが増すにつれて、詩は言葉の結晶体へと近づいていく感がある。

But Love has pitched his mansion in
The place of excrement;
For nothing can be sole or whole

1) “Among School Children”, 1. 8.

2) “The Rose of Battle”

3) “Sailing to Byzantium”

That has not been rent.⁴⁾

イエイツの50年以上にわたる作品群を、現在標準的な一巻本の『全詩集』⁵⁾で俯瞰した場合、その変化の大きさと、変化しないものの根深さに注目せざるをえない。そのため、初期の作品は将来のための習作だったと考えたくなるほどである。イエイツ自身、機会あるごとに初期の作品に手を加えているから、一層そのような印象を受ける。しかし、イエイツの全詩集が、個々の作品とその配列全体によって、一つの詩的世界を完結する仕組みになっていることを考えれば⁶⁾、初期詩集は、この詩の世界の不可欠な一要素ということになる。このような観点から、イエイツ最初期の作品を検討しようとするのが、この小論の目的である。

II

イエイツの最も初期の詩を集めた部分は、『全詩集』では *Crossways* (十字路) と名付けられている。この題名は、1895年出版の *Poems* で初めて用いられたものだが、イエイツはその中で題名の由来について、おもに20歳前後に書かれたこれらの詩が「様々な道を試みた」からであると語っている。⁷⁾ 確かに、アルカディア、インド、アイルランド神話、バラードと題材は豊富であるが、その後のイエイツの作品と比べれば、むしろ単調さの方が目に付く。しかし、ここに収められている詩は、「岐路」に立つ若い詩人の迷いを通して、複雑な詩人の特質の一端をうかがわせているようにも思える。その意味で特に興味深いのは、『全詩集』の巻頭にも置かれている一対の詩、“The Song of the Happy Shepherd” (1885) と “The Sad Shepherd” (1885) である。⁸⁾ したがって、ここでは、

4) “Crazy Jane Talks with the Bishop”, 11. 15-18. 以下、引用した詩には散文訳を付けておく。「愛の殿堂は排泄の場所、割れていなかったら、一つにも、全部にもなれないのだから。」なお、この詩の標準的解説として、次の上島建吉氏の言葉を引用しておく。「ところがこのソウル (sole) とホウル (whole) という英語は、音だけ聞くと、それぞれ「魂」(soul) と「穴」(hole) という意味にもとれるんですね。だから非常に卑猥な比喩を含んでるわけですが、そっちの方を切り捨てればこういう意味になる。つまり、一度肉体と精神との分裂を経験して初めて合一の意味を悟るということ、さらに言いかえれば、一度楽園を失った者のみが楽園の味を知る、そういった逆説がここに説かれていると思うんです。」高橋康也 (司会)『ロマン主義から象徴主義へ』(学生社、昭和50年)、p. 146.

5) *The Collected Poems of W. B. Yeats* (1933; 2nd edn, with later poems added, London: Macmillan, 1950) (以下、CP と略す。) CP と、イエイツが生前、自分の作品の決定版として残そうと計画していた二巻本の全集との微妙な違いについては、A. Norman Jeffares, *A New Commentary on The Poems of W. B. Yeats* (London: Macmillan, 1984), pp. vii-x. を参照。

6) 例えば、John Unterecker, *A Reader's Guide to William Butler Yeats* (New York: Noonday Press, 1959), pp. 4-6 を参照。

7) Jeffares, p. 3.

8) 以下、初期の作品の引用は、*The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats*, ed. Peter

その後のイエイツの方向と関連づけながら、この二つの詩の検討を試みたい。

“The Song of the Happy Shepherd” と “The Sad Shepherd” は、題名が示すように、無垢と経験の歌の要素を持っている。しかし、世紀末の詩人の歌う「幸せな羊飼ひ」にとっては、世界との幸福な一体感は既に失われている。

The woods of Arcady are dead,
And over is their antique joy;
Of old the world on dreaming fed;
Grey Truth is now her painted toy;
Yet still she turns her restless head.⁹⁾

牧歌的理想郷の喪失を嘆くのは、陳腐とはいえ、一つの神話パターンであるし、その代償として手に入れた合理的真理を人間が弄び、また、弄ばれている図も、近現代の新しい神話的パターンである。いわば、この二つのパターンの中にすっぽりはめ込まれてしまった人間の解放が、18世紀末以来のロマン派の一大テーマだったことを考えると、上の引用が示す認識は、最後のロマン主義者を自認していた詩人にふさわしい出発点だったと言える。この認識をスプリングボードにして、どこまで遠くへ飛べるか、脱出できるかということが、イエイツの詩全体に一貫しているテーマだったとみることが出来る。しかし、問題はばねの強度である。それが詩人のヴィジョンを支えられるほど強靱なものになるためには、漠然とした気分や観念ではなく、はっきりと実体をもった一つ一つの現実体験によって鍛え上げられる必要があったのであり、その過程がそのまま詩人イエイツの成長の過程だったと言える。

このような視点から、イエイツのこの最初期の詩を読むと、むしろ、脆弱さばかりが目立つのは当然であるが、しかし、鍛えられるに価する素材の幾つかは確実に提示されていることに気づく。先ず、詩人としての宣言とも読める次の部分である。

But, O, sick children of the world,
Of all the many changing things
In dreary dancing past us whirled,
To the old cracked tune that Chronos sings,

Allt and Russell K. Alspach (New York: Macmillan, 1977) (以下、VE と略す) により、初出の形を用いる。引用した詩については、VE と CP 両方のページを示す。

- 9) VE, 64-5. CP. 7. 「アルカディアの森は枯れ、往時の喜びは過ぎた。世界が夢を糧としていたのは昔で、今は灰色の真理が色付きの玩具。それでもまだ世界は落ち着けず、辺りを見回す。」

Words alone are certain good.¹⁰⁾

この様に、目まぐるしく生成し消滅していく現象の中の不動の一点として言葉に全てを託せば、言葉は道具でも媒体でもなく、世界そのものになるのは当然である。

The very world itself may be

Only a sudden flaming word.¹¹⁾

ヨハネが語るように、初めに言葉があったのだとすれば、世界が言葉となって燃え尽きてしまうというこのイメージは、いっそう、言葉と世界との関係を確実なものにする。しかし実際には、生身の詩人が自分の言葉を一つの世界へと創造しようとするとき、この関係はそれほど確実なものではなくなる。ロゴスとしての神の言葉ではなく、人間の言葉を世界につなげているのは、実は、仮定と願望、つまり、上の引用で言えば“may”にすぎない。人間にとって、言葉とは本来そのようなものであるとすれば、詩人が言葉に全てを託すということは、結局、この仮定と願望に全てを託すということになる。その意味で、この“The Song of the Happy Shepherd”の次の結びの一句は、その世紀末的イメージにもかかわらず、その後のイエイツの長い詩作活動の核心を告げている。

But ah! she [earth] dreams not now—dream thou!

For fair are poppies on the brow:

Dream, dream, for this is also sooth.¹²⁾

もちろん、問題は夢の中身である。この詩は、初出の題名(An Epilogue... Spoken by a Satyr, carrying a sea-shell)が示しているように、森の神サテュロスに託した詩人のアルカディア幻想にすぎない。夢が人間と歴史を包括する壮大なヴィジョンとなって深い洞察を伝えるようになるのは、イエイツがさらに真剣に現実と対峙するようになってからである。

しかし、この詩に限れば、ポイントは夢の中身ではなく、夢の提示である。そして、この羊飼いが「幸せ」なのは、夢見る者の思いが言葉になり歌になると確信しているからで

10) VE, 65. CP, 7. 「この世の病める子らよ。時の神の歌う割れた調べに合せて、やるせなく舞いながら旋回して過ぎていく、はかないものの中で、言葉だけが確かなものだ。」

11) VE, 65. CP, 7. 「世界そのものも、一瞬燃え上がる一つの言葉。」

12) VE, 67. CP, 8. 「大地は夢を止めたが、君は夢見よ。額に咲くケシは美しく、夢もまた真理なのだから。」

ある。

Go gather by the humming sea
Some twisted echo-harboursing shell,
And to its lips thy story tell,
And they thy comforters will be,
Rewording in melodious guile
Thy fretful words a little while,
Till they shall singing fade in ruth;
For ruth and joy have brotherhood,¹³⁾

かなえられない夢を貝に語りかければ、歌になって還ってくると信じられるから「幸せ」なのだが、ここに成立した夢と言葉の世界が、束の間の、狭い自閉的世界にすぎないのは否定できない。これは世紀末詩人の特徴とも言えるが、あるいは、この頃から秘教的知識や儀式に深い関心を持ち始めたイエイツには、このような閉ざされた世界にしか詩は成立しないという思いがあったのかもしれない。いずれにせよ、この詩は、言葉によって語りかけるものは、言葉によって応えるものを得て、そこに一つの世界が完結することを前提としている。

しかし、既に述べたように、この世界が仮定と願望から生れているのであれば、次に問われるのは、当然、現実との関係である。この詩と対を成す“The Sad Shepherd”はこの関係をテーマにしている。

Then sang he softly nigh the pearly rim;
But the sad dweller by the seaways lone
Changed all his words to inarticulate moan
Within her wildering whirls—forgetting him.¹⁴⁾

命令法でも仮定法でもなく、この直接法過去が伝えている事実は、言葉となり、歌となるべきものが、言葉以前の呻き声にしかならなかったということである。これは全ての詩

13) VE, 66. CP, 8. 「波騒ぐ浜辺に出て、こだまを宿す渦巻く貝を拾い、その唇にお前の物語を語れば、旋律巧みな術によって、苛立つ言葉を歌に変え、悲しく消えるまでの束の間は、お前を慰めてくれるだろう。悲しみと喜びは兄弟なのだから。」

14) VE, 69. CP, 9. 「彼は真珠色の貝の口にそっと歌いかけたが、寂しい海に住む悲しい貝は、全てを言葉にならない呻きに変え、迷路のような渦巻きの中に閉じ込めて、彼のことは忘れてしまった。」

人にとって、危険な、しかし避けて通れない事実認識であろう。言葉に託す願いが強いほど、言葉は言葉にならず、しかも、この役立たずの言葉しか頼るものがないとすれば、詩人の宿命的迷路に出口はないことになる。貝殻の渦の中からはついに出不来ない。

しかし、この迷路からの脱出の方向だけは、これらの詩自体が内包しているように思われる。言葉と夢と現実の関係を、一対の詩として対比して提示したこと、この問題に対する若いイエイツの自覚がうかがえる。

一つは言葉に対する幻想そのものを、現実との関係から絶えず問い直していくことである。たとえ言葉によって一つの世界が出来たとしても、言葉を歌にして語り返す「幸福な」貝も、言葉を呻きに変えてしまう「悲しい」貝も、結局、同じ自閉的な世界にすぎないとすれば、この貝の殻を破って外に出るためには、媒体としての言葉の日常性を取り戻さなければならないことになる。透明なガラスのように、ニュートラルな媒体を想定しても、それは言葉に対するもう一つの幻想にすぎないかもしれないが、貝の迷路の中で言葉と共に溶解しつつある詩人にとっては、解毒剤の役目を十分果たすはずである。

イエイツの詩全体の展開は、一般に、「世紀末詩人」から「現代詩人」へと向かう方向でとらえられるが、それは、一言で言えば、自閉的な象牙の塔の解体と、現実に立脚した新しいヴィジョンの創造だった。そして、その方向がそのまま、言葉そのものにも反映していったと言える。¹⁵⁾ 後期のイエイツの特徴は、日常的な語法によって、日常性とは次元の異なる世界を作り上げたことだが、その出発点は、この「悲しい羊飼いの」呻きにあったと言えるかもしれない。言換えれば、それは、自分の言葉のこだまに満足する幸福よりも、言葉にならない、inarticulate な世界を、articulate な言葉によって提示しなければならない詩人の不幸を選ぶ覚悟である。

貝の迷路からのもう一つの出口は、いま述べた言葉の問題とは逆の方向にある。つまり、自分だけの世界の確立である。それは現実逃避から始まるが、外部の世界と激しく衝突を繰り返すことによって、外に向かって開かれていく可能性を秘めている。そのようにして形成されていく世界は、外部の世界を巻き込むことはあっても、外部の世界に巻き込まれることはない。

この方向から、“The Song of the Happy Shepherd”の「歌」と、“The Sad Shepherd”の「呻き」を見直せば、結局、想像力の問題に行き着く。既に見たように、「幸福な羊飼いの」は、灰色に塗り潰された世界の中で、緑の大地を夢見ることができた。言換えれば、詩人は、遙か昔に葬られた森の神を呼び起こして、一つの喜ばしい夢を語つ

15) “A Coat” (1912) は、この方向に向かうイエイツ自身の宣言として有名である。I made my song a coat / Covered with embroideries / Out of old mythologies / ... there's more enterprise / In walking naked. CP, 142. 「古い神話を刺繍にして、上着を飾って歌に着せたが、(中略)裸で歩くほうが大事業なのだ。」

ているのである。

And still I dream he [faun] treads the lawn,
Walking ghostly 'mong the dew,
Pierc'd by my glad singing through,
My songs of old earth's dreamy youth.¹⁶⁾

一方、「悲しい羊飼い」が歌にしようとしている言葉は、自分の悲しい身の上話だけである。

.... 'to this [shell] will I my story tell,
And my own words re-echoing shall send
Their sadness through the hollows of its heart.
And my own tale again for me shall sing,
And mine own whispering words be comforting,¹⁷⁾

これも言葉に託した仮定と願望ではあるが、しかし、その結果が「言葉にならない呻き声」にしかならなかったことは既に見た通りである。この二つの詩を比較してみると、言葉が歌になるか、呻き声で終るかを決定しているのは、肯定的なイメージの有無である。“The Song of the Happy Shepherd”の現実認識そのものは決して幸せなものではないが、そのような現実を押しもどそうとする非日常的世界が並置されることによって、ささやかながらも一つのヴィジョンが提示されている。一方、悲しい羊飼いは、現実には押し潰されていく嘆きしか語れないことによって、想像力を持たない言葉の不毛性を証明することしか出来ない。

「受け身の苦しみは詩のテーマにはならない……鏡の裏に逃げ込んだ精神には、大きな世界は映らない」¹⁸⁾ とは、晩年のイエイツの戦争詩批判であるが、この言葉は、今取り上げている二つの詩が内包していた問題にもそのまま当てはまるだろう。嘆きだけでは詩にならないのと同じく、想像力といえども、逃避的な、閉ざされた世界を造るだけで終わってしまう危険が常にある。精神を外に向かって開き、外界を十分映し込むことによってしか、

16) VE, 67, CP, 8. 「今も夢見る、森の神ファウヌスが、まだ夢を忘れなかった大地の青春を歌う私の歓喜の歌を浴びながら、露のなかを幻となって草地を歩む姿を。」

17) VE, 68, CP, 9. 「この貝に身の上を語れば、悲しみも貝の中にこだまして、囁きは歌となって還り、私を慰めてくれるだろう。」

18) W. B. Yeats, ed. *The Oxford Book of Modern Verse* (London: Oxford University Press, 1972), p. xxxiv,

内部の想像力は強さと豊かさを得られないのかもしれない。恐らく、そうして初めて、人間の夢と現実を語る言葉は、いわば、角度によって透明にも鏡にもなる偏光ガラスのような複雑な豊かさを帯びるようになるのであろう。その意味で、『全詩集』の巻頭に置かれたこの二つの詩は、イエイツの詩の向かうべき方向を示すとともに、その牧歌的素朴さ故に、現実と想像力の絡み合う彼の詩の構造を、最も単純な形で見せていると言える。

III

複雑多岐な有機的構造へと成長していくイエイツの想像力と言葉の世界を、“The Song of the Happy Shepherd” と “The Sad Shepherd” を手掛かりとして、いわば、その萌芽の状態を観察しようと努めてきたが、さらに、これらの詩には、イエイツの詩全体に一貫している問題意識が既に表われていることに気づく。つまり、分裂と融合のテーマである。

イエイツは、全てがばらばらに分解していくという崩壊感覚の中で、それにもかかわらず、統一のヴィジョンを、文字通り一冊のヴィジョン (*A Vision*, 1925) として提示した詩人であるが、最初期の作品の中にも、このテーマに対するアプローチの原型を探ることができるように思われる。

先ず、分裂の意識だが、“The Song of the Happy Shepherd” に次のような部分がある。

... there is no truth
 Saving in thine heart. Seek, then,
 No learning from the starry men
 Who follow with the optic glass
 The whirling ways of stars that pass—
 Seek then, for this is also sooth,
 No word of theirs—the cold star-bane
 Has torn and rent their hearts in twain,
 And dead is all their human truth.¹⁹⁾

ここで問題にされているのは、心 (heart) と知識 (learning) の間の、いわば、二元論

19) *VE*, 66. *CP*, 8. 「真理が宿るのは君の心の中だけなのだから、ぐるぐる巡る星の軌道を望遠鏡で追い回す男たちから学ぶことは何もない。決して彼らの言葉を求めるな。冷たい星に毒されて、彼らの心は二つに割れ、人の真理をなくしてしまったのだから。」

的な分裂ではなく、心そのものの分裂である。星の運行を望遠鏡で観察する天文学に代表される客観的科学知識は、ここでは、心を真っ二つに割ってしまうくさび、あるいは、毒としてとらえられている。「冷たい、星に毒された」知識というイメージは、おそらく、ブレイク (William Blake) の、例えば、ニュートンを批判した次の詩句を踏まえることによって、その意味するところがより明確になるかもしれない。²⁰⁾

Now I a fourfold vision see

.....

And three fold in soft Beulahs night

And twofold Always. May God us keep

From Single vision & Newtons sleep²¹⁾

ロマン派詩人の功績の一つは、客観的観察ではとらえられない不可視な世界に真理を求めることによって、自然科学の発達が促した合理的世界観を絶えず批判し続けたことだが、「ニュートンの単一の世界」、あるいは、「灰色の真理」に対抗すべき、多元的、多彩な世界が存在できる唯一の場は、主観、すなわち、心だけである。したがって、問題は、主観と客観の分裂ではなく、主観そのものの分裂であり、前章で述べたイエイツの比喩を用いれば、外界を映すべき精神の鏡が割れてしまうことである。「幸福な羊飼い」が「世界の病める子供たち」に診た症状も、知識によってくさびを打ち込まれた心の分裂であり、既に存在しないアルカディアの幻想は、このくさびに対抗する、いわば、抗体としての想像力の原型を示していたと言える。

心の分裂は、同じく *Crossways* に収められている “The Meditation of the Old Fisherman” (1886) にも、明確な形で表現されている。老いた漁師は、海が喜びに満ち、魚も多く、乙女が美しかった昔を懐かしむのだが、その昔を語るリフレインは次の一句である。

When I was a boy with never a crack in my heart²²⁾

20) イエイツは早くからブレイクに強い関心を持ち、1893年には、E. J. Ellis と共に、ブレイクの著作集 (*The Works of William Blake, Poetic, Symbolic, and Critical*. 3 vols) を編集している。

21) “To Thomas Butts, 22 November 1802”, 11. 83–88. *William Blake: The Complete Poems* (Penguin Books, 1983), p. 487. 「いま私には世界が四つに見える。(中略) 穏やかな幻想の夜には三つに、そして常には二つに見える。神よ、単一の世界観とニュートンの眠りから我等を救いたまえ。」

22) *VE*. 91. *CP*, 23. 「心にひび割れなどなかった少年の頃は。」

この詩は、青年時代のイエイツが出会った老人の言葉をもとにしたものだが²³⁾、これもまた、人は過去の黄金時代から落ちていくというパターンである。しかし、“The Song of the Happy Shepherd” の場合は、過去のアルカディアを呼び起こす想像力が、現実の心のひび割れを癒す力となりうるということが語られていたのに対して、この詩では、一人の老人の回想は分裂を嘆くだけで終わる。

イエイツの詩の展開にとって、この差の認識は重要だったように思える。アルカディアにせよ、千年王国にせよ、現実の遙か彼方に理想世界を想定するような想像力は、未知の過去から未知の未来へと進行中の人類の歴史に適用できても、始まりと終わりが限られている個人の人生では有効性を持たない。人間の歩みに伴う知識と経験が、必然的に、「進歩」をもたらすとしても、それは、一人の人間にとっては、肉体に刻まれる皺と同じ必然性であり、それ自体、衰退以外の何ものでもない。結局、この宿命的パターンから抜け出すことは不可能となり、嘆きだけが深まることになる。しかし、ここで大切なのは、この「嘆き」が、第2章で述べた「悲しい羊飼いの「呻き」と同じ意味で、イエイツの詩の一つの出発点だったと考えられることである。つまり、言葉と想像力に対する若いイエイツの願いと信頼は、現実の「呻き」と「嘆き」によって絶えず脅かされていたのであり、この緊張関係によって、イエイツの詩は次第に深まっていったと言えるだろう。

現実、言葉、想像力が絡み合って作り出す、この張りつめた緊張を支えられるのは精神の強靱さだけだとすれば、最後まで問題として残るのは、「心のひび割れ」である。それが肉体の皺と同じ必然なのか、あるいは、知識と経験をも包み込む融合的な、完全な世界へと生成していく可能性を秘めているのか、結局、この問をイエイツは最後まで問い続けることになる。この小論は、イエイツの出発点を対象にしてきたのだが、ここで、この問に対する晩年のイエイツの解答の一つを見て、イエイツの詩がたどることになる方向を確認しておきたい。

An aged man is but a paltry thing,
A tattered coat upon a stick, unless
Soul clap its hands and sing, and louder sing
For every tatter in its mortal dress,²⁴⁾

これを、既に第1章で引用した次の部分と重ね合わせたとき、心のひび割れをも、哄笑

23) Jeffares, p. 14.

24) “Sailing to Byzantium”, 11. 9-12. CP, p. 217. 「老人とは、案山子同然のつまらぬもの、棒切れにかかったぼろ上着にすぎない。もし、魂が手をたたいて歌い、肉体の衣が綻びる度に、さらに声高く歌わないとすれば。」

しながら一撫でで完全な世界へと昇華してしまう、魔術師めいた老詩人の姿が浮び上がってくるはずである。²⁵⁾

For nothing can be sole or whole

That has not been rent.

若い詩人の出発点にあった分裂の意識と融合への願いは、肉体、魂、人生、歴史、とあらゆる問題を同時に視野に置く形で展開され、後期のイエイツの最重要テーマとなっている。互いに向き合う二つの円錐の組み合わせや、月の満ち欠けの28の相を通して語られるイエイツの思想、あるいは、ヴィジョンは、秘教めいた複雑さと曖昧さに満ちているのだが、恐らくその基本原理は、衰退と生成の同時進行にあると言えるであろう。イエイツの詩は、この基本原理の源でもあり投影でもある様々なイメージを中心に、その成長の跡をたどることが可能であり、この小論が扱ってきた、初期の詩と後期の詩の「割れる (rent, crack)」という言葉も、そのようなイメージの一つと見ることができる。割れることによって初めて一つの新しい世界が約束されるとすれば、全ては割れ目から始まる。初期の作品の亀裂と、詩人自身の分裂の意識こそ、イエイツにふさわしい詩の始まりだったと言えるであろう。

25) これは、肉体の専門家である売春婦が、魂の専門家である司祭に語る言葉であるが、そこに成立するのは、やはり、言葉の専門家である詩人の世界であろう。